「あーあ、全部やられちゃった」
　建物の屋上から焼かれていく邪獣を見つめながら、タワーがつまらなそうに声をあげた。
「僕たちでやっつけにいく？」
「今日はここまでよ」
「えー」
「そういう言いつけだもの」
　ハーミットは気づいていた。
　暗がりの中から見ていた限り、二人の男が放った魔法は三つ編みの男も巻き込んでいたはず。現に邪獣は三体ともその火中に飲まれていった。
　しかし三つ編みの男は倒れこむこともなく、平然としている。
　ハーミットはノランとアルノルドを交互に睨んだ。
「獅子頭と三つ編みの男。二人も諸悪の根源がいたなんてね」
「もう一人は？」
　タワーがネックを指差した。
「さあ。見た感じはただの異血だけど」
「ふうん。強い異血なんだね」
　これだけの邪獣を送り込んで傷ひとつない。
　タワーの言う通り、異血にしては手練（てだ）れだ。
「これからどうするの？」
「……目的は果たしたしわ。手持ちの邪獣もないから今日は撤収しましょう」
「あいつらをマークすればいいの？」
「そうよ。よく分かってるわね、タワー」
　あのふたりに関しては――あまりにも、未知なことが多すぎる。
　ハーミットとタワーは、溶けるように闇の中へ姿を消した。